

『四庫全書存目叢書』 笱記

松 浦 章

関西大学図書館に収蔵された『四庫全書存目叢書』について紹介したい。本叢書を紹介する前に、本叢書の成立に極めて関係深い史上有名な『四庫全書』の編纂について簡単に触れたい。

『四庫全書』の編纂

中国の清朝の乾隆帝（在位：1735～1795）は、全国の古今の重要書籍の収集を企図し、経・史・子・集の四部に分類編集して一大叢書を編纂させて完成したのが『四庫全書』であることは周知のことである。

乾隆帝は乾隆三十七年（1772）正月四日付けの内閣にたいする上諭において、

古今来著作之手、無慮数千百家、或逸在名山、未登柱史、正宜及時採集、彙送京師、以彰稽古右文之盛。其令直省督撫會同學政等、通飭所屬、加意購訪。¹

と、全国各地に重要書籍の収集を命じた。

翌乾隆三十八年二月二十八日付けの上諭によれば、現在查弁四庫全書之翰林官等、著照武英修書処之例、給与飯食。²

と、すでに『四庫全書』の編纂に従事していた翰林院の官吏に対して、武英殿での修書と同様の待遇を与えたことが判る。このことで『四庫全書』の編纂を専門に扱う機関が誕生したことになる。その後、乾隆六十年（1795）十一月十六日には戸部尚書であった曹文植により『四庫全書総目』の印刷が完成したことが報告されている。³

この結果、『四庫全書』3461種約八万巻が完成し、清代には熱河（承德）の避暑山荘に文津閣、北京円明園に文源閣、北京の紫禁城に文淵閣、盛京（瀋陽）に文溯閣を、そして、民間の閲覧に提供するためとして江蘇省の揚州の大観堂に文匯閣を、鎮江の金山寺に文宗閣を、浙江杭州聖因寺に文瀾閣をそれぞれ設けて閲覧に供した。しかし、その後の太平天国の乱や義和団事件等の戦乱によって鎮江の文宗閣、揚州の文匯閣、円明園の文源閣は消失し、他も戦乱

による移動等で少なからざる被害を受けたのであった。このうち、台湾へ渡った文淵閣本をもとに＜四庫全書珍本＞のシリーズが刊行され、その後、さらに全本が影印された＜景印本文淵閣『四庫全書』＞が広く世界において利用されることになったのである。この『四庫全書』の成立と本叢書は密接な関係があるのである。

『四庫全書存目叢書』の編纂

『四庫全書』の編纂の過程で乾隆六十年（1795）に『四庫全書総目』が刊行されたが、この総目には、『四庫全書』に収められなかった書籍が6,793種あるとされ、その種類は『四庫全書』の二倍に達する。この『四庫全書総目』に著録されたが、『四庫全書』に収録されなかった未収の書籍を収集し一大叢書にしたものが、ここで紹介する『四庫全書存目叢書』である。

即ち『四庫全書存目叢書』は『四庫全書総目』に見えて『四庫全書』に採録されなかった書籍を収集し刊行されたものである。

中国では1992年に全国古籍整理委員会が、『四庫全書存目叢書』の編纂と出版の具体的日程を提案して、準備に入り1993年1月に中国東方文化研究会歴史文化分会会長である北京大学劉俊文教授を主任として、具体的作業に入り、1997年10月に『四庫全書存目叢書』が完成したのである。『四庫全書存目叢書』完成のために中国内外の図書館から蔵書が採録され、とりわけ北京図書館・北京大学図書館・上海図書館・中国科学院図書館・南京図書館・浙江図書館・湖北省図書館・遼寧省図書館・復旦大学図書館・天津図書館・中国人民大学図書館・首都図書館・中山図書館・中山大学図書館等の代表的な116カ所の図書館、博物館、個人等から収集し、4508種の書籍を収集することができたのである。⁴

『四庫全書存目叢書』に収録された書籍を四部別にその種類と『四庫全書存目叢書』の冊数を示せば以下ようになる。

目録・索引		1冊
経部	734種	220冊
史部	1,086種	292冊
子部	1,253種	261冊
集部	1,435種	426冊

以上のように、『四庫全書存目叢書』は計1,200冊からなる大叢書である。

本叢書に収められた書籍を時代と状態で比較すると次のようになる。

宋 刻本	15種	
宋 写本	1種	
元 刻本	21種	
明 刻本	2,152種	
明 鈔本	127種	
清 刻本	1,634種	
清 鈔本	330種	
清 稿本	22種 ⁵	計4,302種

このように書籍の成立時期、書籍の形状の判明する4302種のなかで圧倒的量を誇るの明代のものであることは歴然であろう。明代の刻本、鈔本で4302種の内の約53%に達し、明代の刻本のみ限定しても、時代の明らかな書籍全体の50%を越えているのである。

『四庫全書存目叢書』の資料的価値

その意味でも『四庫全書存目叢書』は明代の資料の宝庫とも言っても過言ではあるまい。

明代の資料で重要なものの一つに地方志がある。近年、〈中国地方志叢書〉、〈天一閣蔵明代方志選刊〉、〈天一閣蔵明代方志選刊続編〉、〈中国稀見地方志匯刊〉などの刊行で、かなりの明代の地方志が容易に閲覧できるようになったが、この『四庫全書存目叢書』においても明代の地方志のみに限定しても、史部の第174冊より212冊までの74種の地方志を数える。

史部 地理類 第166冊に収められた『一統路程圖記』八巻があるが、近年このような路程書が注目され研究されるようになったことから考え清代において『四庫全書総目』が注目し目録に採録していたことは貴重である。これに関連する書籍に明末の刻本の影印本である『士商必要』三種十二巻⁶があるが、これは近年の編纂物として収められたものであり、『四庫全書』編纂過程で既に、路程書が注目され総目に収められたことの意味を再考する必要がある。

史部第175冊所収の『成化杭州府志』六十三巻は、『四庫全書存目叢書』では南京図書館蔵の明成化刻本の影印であるが、日本では山根幸夫氏編の『新編

日本現存明代地方志目録』(汲古書院、1995年5月)26頁では東洋文庫において北京図書館蔵書本により、巻4~6, 11~59, 62, 63が欠本である。『四庫全書存目叢書』の出版によってはじめて全巻日本で見る事が可能となった。

史部第182、183冊所収の『嘉靖・江西通志』三十七巻は山根氏の目録では、尊経閣文庫は全本であるが、東洋文庫では北平図書館時代のマイクロフィルムで巻1~7, 14~29, 32~37が欠本とされている。

史部第204から207冊に収められた何喬遠の『閩書』一百五拾四巻は山根氏の目録では、東洋文庫、内閣文庫、尊経閣文庫、宮内庁書陵部で閲覧できるとあるように、すべて東京にあり、関西在住の研究者では不便があったが、容易に閲覧できるようになった。また最近、福建人民出版社から『閩書』の排印本5冊本が刊行になり便利になったが、原刻本の影印本は貴重である。

子部の兵家類に分類され本叢書、子部第31冊に収められた侯継高の『全浙兵制三巻附日本風土記五巻(附原缺)』がある。本叢書では天津図書館の旧鈔本により収録されている。日本では内閣文庫に全浙兵制考三巻日本風土記五巻明刊本が所蔵されている。これは九州の豊後佐伯藩主毛利高標の旧蔵書である。⁷この全浙兵制考三巻日本風土記五巻に関しては内閣文庫に所蔵される毛利高標の旧蔵書がおそらく世界で唯一で最良のテキストであると言える。

『閩書』と同様に明代の資料は関西では見ることが困難なことが多かった。その一例として集部第117冊から119冊に収められている明・汪道昆の文集である『太函集』『太函集副墨』がそれである。原版本で閲覧すれば漢籍が100冊以上になる。仮に閲覧できたとしても一度に貸し出してくれる図書館は極めて稀である。本叢書では僅かに3冊で汪道昆の業績を見ることができるのである。日本では現存の版本が少なく、また所蔵されている研究機関が限定され、しかも大部の資料であるため利用に極めて困難であったが、とりわけ『太函集』が『四庫全書存目叢書』に収められことは、明代の徽州研究をはじめとする分野にとって研究上の便宜は計り知れない。

集部第129冊に収録される龐尚鵬の『百可亭摘稿七巻詩集摘稿二巻』は広東の中山大学図書館蔵の明・萬曆二十七年刻本に依拠したものである。これ

に対して、日本に現存するのは東洋文庫に所蔵されるのは清代の道光十二年重刊本⁸であることから本叢書のテキストが古いと言える。

同集部129冊には琉球国王の冊封のために派遣された郭汝霖の文集である『石泉山房文集十三巻』が浙江図書館の明・萬曆二十五年郭氏刻本により収められている。これまで日本で同書を見ることができたのは京都大学人文科学研究所で、その書は、1970年に台湾の国立中央図書館の萬曆二十五年郭氏家刊本の景照本であった。⁹ 彼の琉球への使録は本叢書の史部第49冊に収められる『重編使琉球録』であり、著者は『四庫全書総目』以来郭世霖と誤っていたことは既に夫馬進氏によって指摘されている。¹⁰

『石泉山房文集』巻八、序、「刻使琉球録序」に、

使琉球録者、録自陳・高二公始也。琉球帰化聖朝、前此嘗有使矣、而弗録焉遺也。遺則後將何述、滄溟萬里、不無望洋之歎、此録所以作也。

と記しているように、郭汝霖に先行する琉球への冊封使であったのは陳侃と高澄であり、陳侃が記した『使琉球録』が、明代を経て清代に続く琉球国への冊封使の記録として連綿と残されるきっかけになったのである。

集部第136冊の許孚遠の『敬和堂集』は明末の海外交渉史研究に重要な資料であるが、本叢書では北京図書館蔵の明萬曆刻本により存4巻とある。序は萬曆甲午(二十二年、1594)序刻本であり、序、記の二巻のみである。「総目」には敬和堂集八巻とあり、序、記、雑著、移2巻の計8巻である。山根幸夫氏編『増訂日本現存明人文集目録』によれば、日本には内閣文庫、静嘉堂文庫、尊経閣文庫に所蔵されている。この三箇所文庫ともに「敬和堂集十三巻」とある¹¹ことから、「敬和堂集」に関しては日本に現存するテキストの方が最善のものと言えるであろう。

集部第175冊に『五雜俎』の著者で有名な謝肇淛の文集である『小草齋集三十巻、続集三巻、小草齋文集二十八巻』が収められている。山根氏の明人文集目録では、日本現存では小草齋文集は尊経閣文庫にあり、内閣文庫本は第一巻から第三巻までを欠いており¹²、小草齋集三十巻の方は日本では見られなかったようであるので、本叢書は重要である。

上述のように、『四庫全書存目叢書』は『四庫全書』と密接な関係があるが、そのことと関係が深いように、収録されている書籍は明代清初のものが極めて量が多く重要であると言える。その理由は、次代の清朝が満洲族の王朝で、漢人の排満洲族的な記述の多い明代の書籍を排斥したこともあり、明代の書籍の多くは特に日本に流失したとされている。しかしそれらのテキストを所蔵する図書館等は東京に集中していた。この『四庫全書存目叢書』の刊行は研究者に対する機会均等のチャンスを与えたと言えるであろう。中国の大学の図書館でもこの『四庫全書存目叢書』が配置されている事例を直接見た経験¹³から言っても、本『四庫全書存目叢書』の刊行は研究の進展に寄与することは歴然である。

- 1 中国第一歴史档案馆編『纂集四庫全書档案』上海古籍出版社、1997年7月、上冊、1頁。
- 2 『纂集四庫全書档案』上冊、63頁。
- 3 『纂集四庫全書档案』下冊、2374頁。
- 4 『四庫全書存目叢書 目録索引』莊嚴文化事業有限公司、1997年10月、「四庫全書存目叢書編纂緣起」11頁。
- 5 同書、「四庫全書存目叢書編纂緣起」13頁。
- 6 北京図書館古籍珍本叢刊82, 子部・叢書類「壽養叢書」(北京図書館古籍出版編輯、書目文献出版社) 821~969頁。
- 7 『改訂内閣文庫漢籍分類目録』1971年3月、148頁。
- 8 山根幸夫編『増訂日本現存明人文集目録』東京女子大学東洋史研究室、1978年3月、159頁。
- 9 夫馬進編『増訂使琉球録解題及び研究』榕樹書林、1999年9月、19211頁。
- 10 夫馬進編『増訂使琉球録解題及び研究』19頁。
- 11 山根幸夫編『増訂日本現存明人文集目録』39頁。
- 12 『増訂日本現存明人文集目録』68頁。
- 13 松浦章「中国家譜研究の新展開」『東方』217号、1999年3月、10頁。

(文学部教授 まつうら あきら)